
殺意の沈黙

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺意の沈黙

【Nコード】

N5781H

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

何処からか、鳴き声が聞こえた。辺りは騒音に包まれているのに、確かに聞こえた。僕は、その方向に歩き出して……。

僕には、鳴き声が聞こえた気がした。

だが、キョロキョロと周囲を見渡すも、それらしい光景は目に入らない。

辺りは鬱陶しい人混みや交通渋滞で、五月蠅いほどの騒音に包まれているのだ。

大抵の小さな音など、街にかき消されてしまっただろう。

だが、僕の足は引き寄せられる様に、鳴き声がした方向に歩き出していた。

声の元を辿っていると、いつの間にか僕は裏路地まで入り込んでいた。

だが、特に気にすることもなく、ビルの隙間、1人が通り抜けるのがやっとの通路を抜けていく。

すると、片隅に青いゴミバケツがぽつんと置いてあるのを見つけた。周囲には沢山の蠅がブンブンと不快な怪奇音を奏で、冷えた嘔吐物とアンモニアの臭いが充満している。

僕は迷わず近寄り、ガムテープで補強されている蓋を開けた。

中には死にかかった一匹の猫がいた。

黒くなったバナナの皮や、蟻が集まっている弁当箱の上に横たわっていた。

ブクブクと赤い気泡を吐き出しつつ、哀れな声で鳴いていた。

激しく酸素を求めているらしく、腹部を大きく動かしている。

急に怖くなった僕は慌てて蓋を戻し、その場から逃げる様に走って帰った。

家の中に飛び込み、靴を脱ぎ散らかし、水道に口を付けて水を飲み

干した。

どうにも胸の奥が熱くて、無性に喉が渴いていたのだ。

激しく水飛沫が舞い、ワイシャツの胸元がビショビショになってしまった。

水分を取って少し落ち着いたのか、僕は部屋の中を見渡した。

どうやら母はまだ仕事から帰って来ていない様で、テーブルの上には簡単な晩ご飯がラップに包まれている。

僕は濡れたワイシャツを脱ぎ捨てると、上半身が裸のまま冷めたチャーハンを食べた。

お腹はふくれたが、このままでは力ゼを引きそうだったので、とりあえず湯につかることにした。

家のお風呂は24時間沸騰しており、何時でも入れるというのが今日は嬉しかった。

僕はゆっくりと肩まで沈め、心も体も暖めた。

明日も早く家を出るので、僕は早めに布団に潜り込んでおく。

そつえば、まだ登校の準備をしていなかったが、早朝にやれば良いかと思った。

暫くはモゾモゾと身体を動かしたりして寝返りをうつ。

足の裏だけが奇妙なほど熱を持っており、心臓の音は激しさを増すばかりであった。

眠れない理由は分かっていた。

気が付けば、僕はパジャマのまま家を飛び出していた。

外はポツポツと小雨が降り始めている。

だが、僕の足が緩むことはなく、全力で商店街を駆け抜けた。

途中、酸欠で意識が朦朧としていたらしく、携帯ばかり見ていたサラリーマンとぶつかって転倒してしまう。

少し膝を擦りむき、出血していたが、僕は直ぐに立ち上がった。

あの路地裏まで急いで行きたかったのだ。

僕がゴミ箱の蓋を持ち上げると、まだ猫はいた。腐った灰色の汁と赤い血が混ざった液体から頭だけを出していた。猫は心から空気が欲しかったのだろう。ザラザラとした長い舌を付きだしたまま、はく製の様に動かなくなっていた。

僕は、それをヒョイと持ち上げ、股の間をのぞき込んだ。逸物は付いていないので雌猫だった。

瞼が接着剤で固定され、開けない様になっている。指がねじ切られていた跡があり、片腕だけは根本から引っこ抜かれていた。

尻尾から頭まで鋭利な傷が繋がっているのは、きっとハサミで切り裂き、皮を剥ぎ取るうとした痕がある。

全身の骨は砕けているらしく、何処に触れても湿った雑巾の様な感触がしなかった。

更に雨脚が強まったらしく、濡れたパジャマがピツタリと僕の素肌に吸い付いていった。

猫を握っている手にまで、どす黒い赤色が染みこんでいく。

僕は上着に血を擦りつけると、近くに落ちていた石を掴み取る。

丁度、段差が出来ている所があり、まるで祭壇に置く様に猫をアスファルトの上にねかせた。

口をだらしなく開けているので、そこに雨が降り注ぐ。

僕は石で猫の頭を砕いた。

薄っぺらい肉を叩いた音がした。

全てが雪崩れ込む排水溝に、一本の赤いラインが流れ込んでいった。

僕は猫を戻し、家に帰って布団に入った。今度は直ぐに眠りにつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5781h/>

殺意の沈黙

2010年10月9日09時58分発行